

基礎演習 A

なぜ日本のお土産には食べられるものが多いのか

W13

はじめに

日本では旅行や出張から帰るときはもちろん、他人の家を訪ねるときにもお土産を持っていくことが多く、習慣のようになっている。どのようなものを買うかは相手によって変わると思うが、多くの人食べられるものをお土産に選ぶことが多いように感じる。しかし、それは何故なのだろうか。その理由を私は多くの人に分けるためではないかと考えた。

お土産の起源

そもそもお土産とはどのようにしてできたのだろうか、またどのようにして現在のよに習慣化したのだろうか。お土産の由来は、仏堂を意味する宮と食物を盛る器を表す筥という漢字を書く^{みやげ}宮筥という言葉だとされている（武光、2007）。宮筥とは昔の人が寺社に参るときに持っていった器のことで、その器で酒を神前に供え、そのあとその酒を授かり、集まった人たちで分けたのではないかと神崎は述べている（神崎、1997）。一度神に供えられた酒は神聖なものであるとされていたため、その神聖なものを頂くことで神の恩恵を得ようとしたのである。

お土産の発祥

それではどのようにして現在のようなお土産の形になったのだろうか。それは神から

恩恵を頂いた人たちが、村や家に帰るときにそのご利益をおすそ分けするために、供え物を持ち帰るようになったことが始まりである。また当時は保存方法があまり発達していなかったことやお供え物では数に限りがあったため、お供え物ではなくその寺社にまつわるものが持ち帰られるようになり、そして次第にその場所のもの、という風に変わっていったのである。保存方法が発達したころには多くの人が好き嫌いせずに受け取れるものとして、当時貴重で美味とされていた砂糖を使ったお菓子が持ち帰られるようになった。また当時米が原料となる酒、飯、餅は人々にとって祭りのときなどにしか食べることができないものであったため、最上のごちそうとされていた。そのため、これらは神への供えものとされていた。中でも赤福や吉備団子、安倍川もちなど現代でも原料に餅が使われているお土産は多くあるため、昔の人がお土産に餅を選んでいたことの名残とも考えられるのではないだろうか。

お土産の発展

しかしこれらの食べ物がお土産として世に親しまれ、持ち帰られるようになったのは明治以降の東海道線の開通以降であると鈴木は述べている（鈴木、2013）。その理由は先にも述べた通り保存方法が発達していなかったため、それらの菓子は訪れた人がその場で食べるものとされていたということと、交通手段の多くが徒歩であったことが関係している。鉄道の開通により短い時間で長距離移動することが可能になったことで、食べ物でも品質が落ちたりせず、安心して持ち帰ることが出来るようになったのである。

また赤福のように餅に砂糖をいれることによって保存性をあげたり、安倍川もちや吉備団子のように餅の代わりに求肥を使ったりと日持ちを良くすることでお土産として多くの人に買ってもらえるような工夫などがされている。それ以外にもその土地のものであることがわかるよう、その土地の材料で作ることはもちろん、由緒や由来などといったものも重要視されている。最近では包装にはその土地の名前などが書かれているが中身はどこにでもあるようなクッキーだったり、饅頭だったりするものが増えていることからお土産を選ぶうえでどこに行ったのかがわかるということは大切なのだろう。その例として、岡山県の名物である吉備団子は桃太郎の話にでてくる黍団子とは実際は全く関係がないという（鈴木、2013）。しかし吉備団子のお土産のパッケージには桃太郎の絵が描かれている。このことは、お土産にはイメージも重要であることを明確に示している。以上のような工夫もあり、食べ物の土産は発展していったと言える。

お土産の買うときのポイント

それではなぜお土産を渡すのかということについて考えたい。15歳から20歳の日本人10人にお土産を買うときにどのようなことを意識するのか聞いたところ次のような答えがかえってきた。

（この質問に複数の回答をした人もいたため、その人が最も重要とすることを選んでもらった。）

相手の好み	3人
値段	2人
分けやすさ	3人
量	1人
ご当地ものであること	1人

この結果好みや値段を気にすることはもちろんだが、それと同じくらいの人が分けることを気にしているということがわかる。また分けやすさを重視すると答えた人の内の2人は、分けやすいという理由から食べ物をよく選ぶ、とも答えた。以上の事から現代でもお土産を分けるということは意識されているということがわかる。このことは駅や売店においてあるお土産が小分けにされていたり、同じ商品でも中身の数が異なるものが多数置いてあったりすることからも、分けることが考慮されているといえるだろう。

お土産の持つ意味

なぜお土産を分けるのだろうか。井下によるとお土産を相手に渡す際に感謝、謝罪、応援、これからもよろしくなどといった気持ちがこめられている(井下、1979)。つまりお土産を渡すことで相手に自分の気持ちを伝えようとする意味もあるといえる。そう考えるとお土産が日本に多い理由も考えられるのではないだろうか。日本では幼いときから集団行動を尊重するように言われ、求められてきた。社会にでると、人間関係を築く

ことが大切になる。職場などでも人間関係を築くことによって自分にとってプラスになることが多いからである。また日本では義理、人情、縁や恩などを大切にする考えもあるため、自分が周りの人にお土産を貰うと返さないといけないという気持ちを持つ。そのため、お返しの意味を込めて、お土産を買うということもあるだろう。そう考えると、小さいときには家族や親しい友人にしか買っていなかったお土産を大きくなってより多くの人に買うことが必要になるのも、多くの人と関わるようになったからだと考えられる。比べて欧米ではお土産はあるが、自分の思い出のために買うことが多く、日本のように多くの友人、ましてや職場の人にお土産を渡すことはないという。欧米では幼少より自己主張をするように教えられているということであるから、そのような性格の違いがお土産という場面においても表れているのではないだろうか。つまり日本人はお土産を渡すことによってコミュニケーションを取り、人間関係をスムーズにしようとしていると言えるだろう。

まとめ

そもそもお土産はご利益を分けるために持ち帰るようになったことが起源であること、また日本人特有の集団を大切にするという文化があることから、多くの人に好まれやすく、分けやすい食べ物が多くの人にお土産に選ばれているのではないだろうか。そしてそれらのお土産の発展には企業の努力や交通の発達なども貢献したのだろう。

(2739 文字)

参考文献

- ・ 神崎宣武,1997.『おみやげ 贈答と旅の日本文化』 青弓社
- ・ 武光誠.2007.『常識として知っておきたい日本のしきたり』 廣濟堂出版
- ・ 鈴木勇一郎.2013.『おみやげと鉄道 名物で語る日本近代史』 講談社
- ・ 井下理.1979.『関係と社会心理学 P29～「贈答行動に見る日本人の人間関係についての一考察」』 勁草書房
- ・ 成田善弘.2003.『贈り物の心理学』 名古屋大学出版会
- ・ 徳島辰夫.1998.『仕事と人間関係-社会心理学入門』 ブレーン出版
- ・ ホームステイと留学の MNCC 「日本とアメリカの比較」
(<http://www.mnce.jp/comparison/comparisonmain.htm>)